

宮沢賢治とベジタリアニズム

佐藤 竜一

1 宮沢賢治とベジタリアニズム

「ベジタリアンとは、動物性食品を避け、穀物、豆類、種実類、野菜、果物などの植物性食品を中心に摂る人々である」（アメリカ栄養士会の定義）

紀元前6世紀、古代ギリシアの哲学者・ピタゴラスは肉食を減らすことが自然で健康的な食事法だと説いた→ベジタリアンの起源

日本では7世紀から8世紀にかけ、当時の天皇により肉食禁止令が出される
鎌倉時代 禅宗によって精進料理が確立→江戸時代まで肉食の習慣がない

賢治の場合

盛岡高等農林学校時代 隣の獣医学科から聞こえる動物のものがき苦しむ叫び声から肉食を嫌悪するようになり、菜食主義者となる。

阪内宛の手紙（1918年＝大正7年5月19日付）では、「私は春から生物のからだを食ふのをやめました」とあり、次のように書いている。

けれども先日「社会」と「連絡」をとるおまじなゑにまぐろのさしみを数切たべました。又茶碗むしをさじでかきまはしました。食われる魚がもし私のうしろに居て見てみたら何と思ふでせうか。「この人は私の唯一の命をすてたそのからだをまづさうに食うてゐる。」「怒りながら食うてゐる。」「やけくそに食うてゐる。」「私のことを考へてしづかにそのあぶらを舌に味ひながらさかなよおもへも私のつれになつて一緒に行かうと祈つてゐる。」「何だ、おらのからだを食うてゐる。」まあさかなによつて色々考へるでせう。

魚の気持ちになっている賢治がいます。ベジタリアンとなることで、賢治の作品世界はより深みを増していったのかもしれませんが。

賢治自身は厳格な意味のベジタリアン（ビーガン）ではない。魚介類を抵抗なく食べる

2 作品への影響

例：ビヂテリアン大祭 1920年代に執筆

ある小さな山村に世界各国の菜食主義者の代表が集まり、祭りを開催しようとするが、反対分子が紛れ込んだため、祭りは一転、大論争の舞台となる設定。

小沢俊郎が「生物が他の生命を食べて生きるという原罪への罪意識は賢治童話の重要部分をなしており、解決策の一つを賢治が菜食主義に求めたのは周知の通りである。その主張を理論化し、演説の形で主張したのが本作品である」と解説（『宮沢賢治必携』）。

何度か書き直しをし、未完に終わる。書き直しの際にエスペラントを使用しようとしており、「極東ビヂテリアン大祭挙行と書き直すこと」とあり、原稿が少し書かれている。食糧問題に関する世界会議を題材とするが、改定原稿に「tabako ne estas animalo」とある。

「たばこは動物ではない」を意味するエスペラント表記。世界共通語としてのエスペラントを登場人物に語らせようとした意図がみえる。

改定稿は「1931年9月4日、花巻温泉で第17回極東ビヂテリアン大会が開催される」という設定だが、完成しなかった。この時期の少し前に執筆されたと推定。

完成しなかった理由：賢治が病弱だったため。

1931年9月14日に満州事変が起こり、日本が国際連盟を脱退。エスペラントのブームが終了。日本が軍国主義への道を歩きはじめており、世界平和を求める声はかき消されていた。

→執筆意欲の減退

例：フランドン農学校の豚

生前未発表。大正11年から12年にかけて、執筆されたと推定。冒頭原稿数枚紛失「殺される側」の視点から描いた作品。大正11年冬、農学校で豚をばらし、いものこ汁を食べたことがあった。その体験が生かされた作品（照井謹二郎談）

あらすじ

フランドン農学校一年生が豚の体は生きたひとつの触媒、白金と同じだと話しているのを聞き、学校の豚は自分が第一流の紳士だと思う。2、3日後、歯磨き楊枝を見て豚は気分が悪くなる。畜産学の先生が毎日来ては鋭い目で豚の生体量を計算し、飼料のことなどを助手に指示。二人の目に豚は恐ろしさを発見する。ある日、校長は王から発令された家畜撲殺同意調印法に基づき、死亡承諾書への捺印を求めて豚のところに来る。そのときはそれを話題にせず、後日捺印を迫るが豚は拒否。心労のため、豚はやせる。校長は強引に死亡承諾書に捺印させ、畜産学の先生は肥畜器で豚を肥らせる。八日後、豚は体を洗われ、翌日朝、雪の庭へ連れ出され殺される。

（評価）

「よだかの星」などの系列につながる作品。〈殺すなかれ〉の主張を殺される者の悲しみから描いた名作とし、鋭い社会批判が描かれている一方で詩情に富む結び方をした点に賢治の立場の曖昧さが感じ取れる（小沢俊郎の指摘）

（終わりの方の一部）

豚はもう眼もあけず頭がしんしん鳴り出した。ヨークシャイヤの一生の間のいろいろな恐ろしい記憶が、まるきり廻り燈籠のやうに、明るくなったり暗くなったり、頭の中を過ぎて行く。さまざまな恐ろしい物音を聞く。それは豚の外で鳴っているのか、あるいは豚の中で鳴っているのか、それさへわからなくなった。そのうちもういつか朝になり教舎の方で鐘が鳴る。間もなくがやがや声が出て、生徒が沢山やってきた。助手もやっぱりやって来た。

「外でやらうか。外の方がやはりいゝやうだ。連れ出して呉れ。おい。連れ出してあんまりギー云はせないやうにね。まづくなるから。」

畜産の教師がいつの間にか、ふだんとちがった茶いろのガウンのやうなものを着て入口の戸に立ってゐた。

助手がまじめに入ってくる。

「いかゞですか。天気も大変いゝやうです。今日少し散歩なすっては。」又一つ鞭をピチツをあてた。豚は全く異議もなく、はあはあ頬をふくらせて、ぐたつぐたつと歩き出す。前や横を生徒たちの、二本づつの黒い足が夢のやうに動いてゐた。

例：注文の多い料理店

「注文の多い料理店」初稿の執筆は大正 10（1921）年 11 月 10 日。

自費出版した童話集『注文の多い料理店』（1924 年 12 月）に収録、「序」「どんぐりと山猫」「狼森、策森、盗森」「注文の多い料理店」「鳥の北斗七星」「水仙月の四日」「山男の四月」「かしはばやしの夜」「月夜のでんしんぼしら」「鹿踊りのはじまり」で構成。生前、ほとんど反響を呼ばなかった。

あらすじ：狩猟に来た都心の二人の若い紳士が、山奥で道に迷い、忽然と現れた一軒の西洋料理店に空腹を抱えて飛び込む。ところが、虚栄心が強くひとりよがりの二人の前に次々と現れるのは、店主の奇妙な注文を記したいくつもの扉と長い廊下ばかりで、やがて彼らは店主の。山猫により西洋料理にされるべく、注文を受けていたことに気が月、恐怖のあまり声を出さず泣き出す。が、危機一髪で犬と漁師に救われ、山鳥を十円分買い東京へ帰ってゆく。ただし、恐怖で紙くずのようになった顔だけは元に戻らなかった。

視点 殺生を道楽とする狩猟家への鋭い諷刺 卓抜な物語展開 食べる側と想っていた二人の紳士が食べられる側と気づく
→ベジタリアンであることが投影された作品
物語導入部での猟犬の「死」と結末での登場
自然（山猫）の側からの文明（紳士たち）批判

3 トルストイと賢治

ロシアの文豪・トルストイは 59 歳の時（1887 年）、肉食をやめ、ベジタリアンの道を歩きはじめた（鶴田静著『ベジタリアン宮沢賢治』）。

1917 年頃 世界的なトルストイブーム

1916 年雑誌『トルストイ研究』が日本で創刊

武者小路実篤や徳富蘆花などがトルストイの博愛主義の影響を受ける

武者小路実篤 『幸福者』には菜食をする「師」が登場。「世界が真に平和になるときは、人間は今殺生に神経質になり、菜食主義が次第に勢力を得るだろう」と語らせている。

博愛主義に基づいた作品を次々に発表。

トルストイの理想主義に触発され、宮崎県で「新しき村」をつくる運動を展開。

徳富蘆花 1906年ロシアの農村、ヤースナヤ・ポリャーナにトルストイを訪ねる。
ベジタリアンになり、エスペ란トの学習をする

保阪嘉内 盛岡高等農林の友人。山梨県生まれ。甲府中学校卒業後、盛岡高等農林へ。
入学の動機として、「トルストイを読んで百姓の仕事の崇高さを知り、それ
に浸ろうと思った」と語る。

盛岡高等農林を卒業したら故郷に帰り、村長になって模範的な農村を築くとい
う目的をもっていた。その目的通り、故郷の山梨県に戻り、農業に従事。 →賢治の生
き方に影響を与える。農学校教師という立場に満足できなくなる。

1926年3月31日、花巻農学校教師を辞め、羅須地人協会を設立（「新しき村」の影響）
当時は農村に芸術の風を吹かせようという運動が各地で起こっていた。

エスペ란トの学習＝トルストイの影響

1916年5月、『岩手日報』に田鎖綱紀がエスペ란トの紹介記事
エスペ란トの存在を知り、後に独習

トルストイ エスペ란トの熱烈な支持者。学習者の増加に貢献する

菜食主義・エスペランチスト連盟がつくられ、顧問になる。

「ビヂテリアン大祭」にエスペ란トを登場させたのもトルストイの影響
菜食主義でエスペ란トを学ぶ人が多くいた。